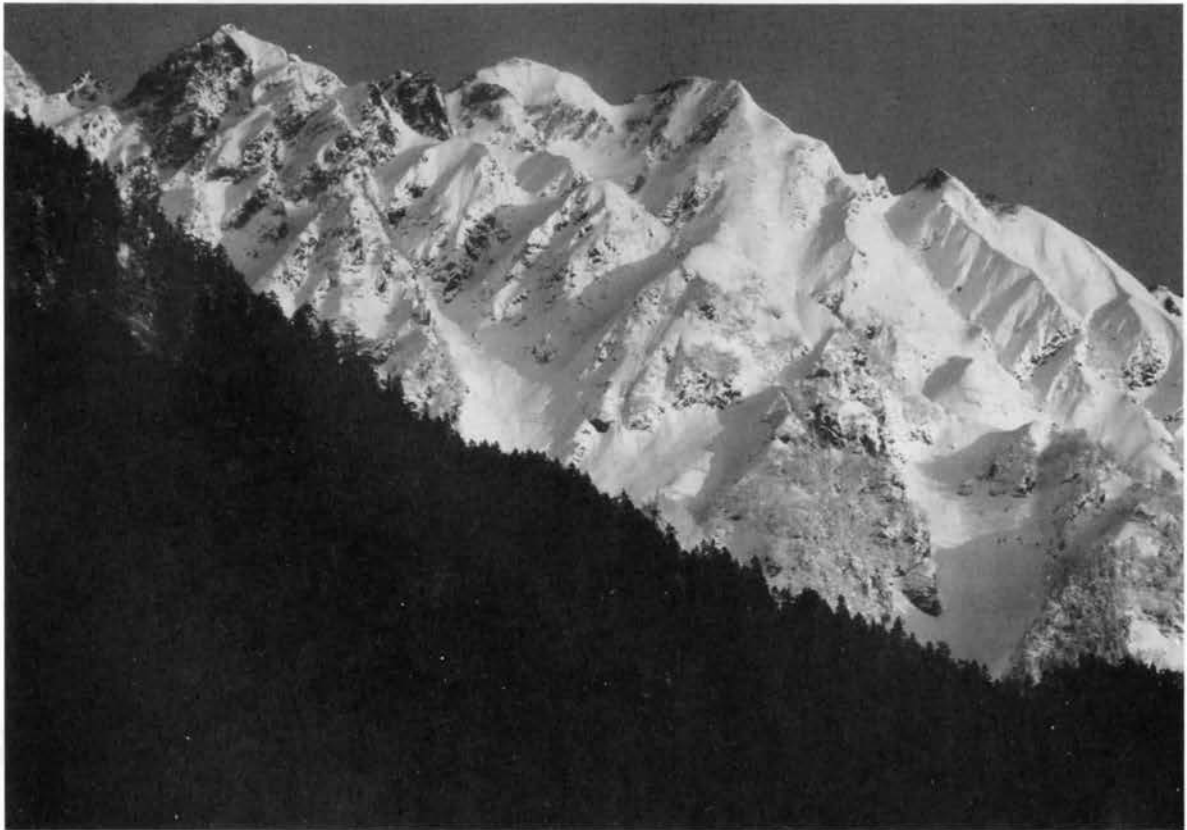


山と博物館

第39巻 第1号 1994年1月25日

大町山岳博物館



山明ける 写真と文 古幡 和敬

上高地 冬

穂高の稜線から雪をとまない岳沢を吹き降りて来た風と、槍や常念岳の山並から梓川沿いに駆け下って来た風とが、小梨平でぶつかり合う。そこで地吹雪となつてどよめき、テントをたわませながら、梓川をさらに下流へと吹き抜けてゆく。

その地吹雪の凄まじさに、独りまどろみの夜を過ごす。朝を迎え昼を過ぎても、いっこうに止む気配をみせない。それはあたかも荒磯に打ち寄せる波浪のように、冬枯れの落葉松や化粧柳の幹や梢を軋ませ唸らせ、遠くからだんだんと近づいては、また速のいてゆく。そんな繰り返しの中で一日はたまたまなく長く、過ぎし日のさまざまな思い出が脳裏をよぎる。

小学校六年の学校登山で、初めて常念岳から見た鋭く天を突いて聳える槍ヶ岳の容姿が、鮮烈な印象となつて心に残り、自分の意思で初めてここ上高地から、独り槍ヶ岳に向かったのは十五歳の夏であった。

天候が回復すれば眼前に険しく聳え立っているであろう、奥穂や前穂や西穂高岳に、夏山合宿で過ごした高校時代。山への想いを断ち切れず、山を生活のすべてにと、二年間のうち百日間を遭難救助に当たり、辛い汗を流した日々などが。

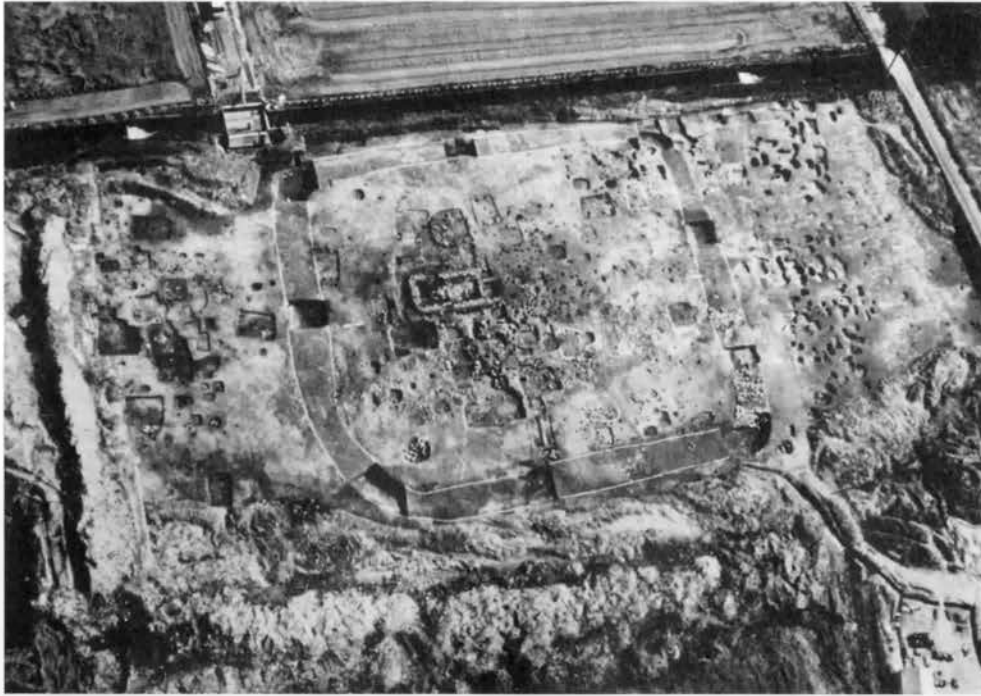
山との関わりの中に過ぎていった三十年の歳月。かつての私にとって山とは何であり、今の私にとって何なのか。次々と去来する想い出に、新たな想いが交差をしながら時は流れてゆく。

少し鎮まりかけた風の間を縫いながら、梓の川音が聞こえてくるようになった。焼岳の山の端に弱々しい茜色の夕陽が沈んでゆく。明日は新雪に輝く朝が訪れてほしい。

(山岳総合センター)

居館跡から発見された錫杖

島田哲男



須沼氏居館跡Ⅰを空から見る（左が北側） [写真1]

ここに紹介する居館跡は、須沼氏居館跡Ⅰと呼ばれる。大町市の南部、高瀬川右岸の常盤地区須沼地籍の河岸段丘上（標高六五六メートル）にあり、昨年七月～十一月に調査されました。

一、居館跡について

居館跡（館跡）とは、地域の有力武士が住んだ堀や塀で囲まれた規模の大きな屋敷跡のことで、この須沼地区には、室町時代（今から七百～四百年前）に大町を拠点として、大北地方を治めていた仁科氏に仕えた須沼氏が二ヶ所に館を造っていました。須沼氏居館跡Ⅰはそのひとつです。ここからは、一辺五十メートルの四角に堀を回した屋敷跡が見つかり、その内側やその周囲から多くの家の跡や墓穴などが発見されました。（写真1）

この家の跡のひとつから山岳信仰に関係する錫杖の頭が見つかりました。錫杖が発見された家は、堀に囲まれた屋敷の中ではなく、北側の堀の外約十メートルの場所にあります。この家は、地面を長方形に掘りくぼめて、そこに建物を建てた竪穴式住居と呼ばれる形の家で、その床面から約三十七センチメートル上部で見つかりました。もしかすると、床面より上部で発見され、居館跡には何百年にも渡って人が住んでいることから、この竪穴の家の家がなくなり、地面に掘られた竪穴が埋まった後に、この竪穴の上に住んだ人達の持ち物の可能性もあります。しかし、家の埋まった後のものと考えても約五十年前後の年代の差が考えられる程度で、この家は十五世紀前後の家跡と考えられることから、この十五世紀代のものと推定されます。



発見された錫杖（左側の一幅の長さ5cm）

二、錫杖について

錫杖は、僧侶や修験者の持った杖で、木の杖の先端に金属製の頭が付いた杖で、金属製の頭には数個の鏢（遊鏢と呼ぶ）が掛けられ、その部分が音を出すようにできた杖である。（今回発見された杖の先端に付けた金属の頭部分を錫杖頭と呼ぶ）

錫杖の名は、杖を持って振ると、シャクシヤクと音をたてることから付き、日本にこれが伝来したのは、仏教の伝来した時期と同じ六世紀中頃といわれる。

錫杖は、山野を歩き回る時にこれを振り鳴らし音を立てて、熊や蛇など有害獣や毒虫を追い払う目的をもっており、また、誦経の時に調子を取ったり、僧侶や修験者が乞食をおこなう時に人の家の玄関に立ったの知らせる目的などをもっている。特に修験道では、山野を巡る修行が多いことから、有害獣や毒虫から身を守ったり、自分の存在を知らせるなどの使いみちから、行事作法に欠かす

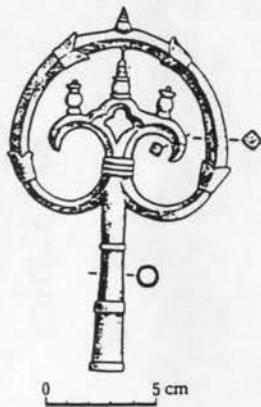


須沼氏居館跡Ⅰのある段丘面（東上空より）
A地点が館の本体が見つかった場所（1992年9月撮影）

ことのできない道具となつたらしい。錫杖は寺などに伝わるものは多いが、出土例は比較的少なく、県内でも数例しかない。修験道といえは山岳信仰であり、北アルプスの大日岳山頂や日光の男体山山頂などで発見された例もある。今回のような平地部で発見される例は最も少ない例である。

今回発見された錫杖頭は、銅製で全長十三センチメートルあり、頭の輪は円に近いスベード形（宝珠形）で長さ七センチメートル、最大幅が六センチメートルあり、頂上部に一・六センチメートルの五輪塔の装飾を付けている。輪は蔓草（つるくさ）をかたどって、左右四ヶ所の節に唐草の葉芽をかたどった出張りを出し、輪の中央に左右に巻き込んだ蕨（あざみ）手状の装飾をし、その装飾の左右の上部

日光男体山出土の錫杖頭
「日光男体山」一九九三年角川書店より



錫杖を持って歩く僧（矢印が錫杖頭）
「資料・日本歴史図録」一九九二年柏書房より



にそれぞれ一センチメートルの宝の瓶を装飾に付け、その中央に二・五センチメートルの層塔を輪の内側上部に付けて装飾している。輪の左右には片側二ヶ、片側三ヶの遊鏢を付けている。木の柄を差し込む穂袋の径は最大径で一・八センチメートルあり、柄の長さとはつきりとしながたさは二センチメートルくらいと推定され、穂袋の中には、差し込んだ木の柄の一部が残った完全な形の優品で、保存状態も錆があまり進んでいない良いものであった。

果敢な荒業により心身を鍛え、それにより霊

ことがわかる。

修験者は、山には神・仏がいると考え、山を聖地として、山を実際の修業の場として、

三、修験場について

このような修験道に欠かすことのできない道具である銅錫杖頭が、この須沼氏居館跡Ⅰの家の後から発見されたという事実は、この館に修験者が住んでいたことを示している。おそらく修験者は、この館の領主に雇われ、領国の安全や農作や武運長久などの加持祈禱をおこなっていたものと想像される。

さて、この修験者の修験場であるが、この須沼より南東を眺めるならば、北安曇郡松川村と南安曇郡穂高町の境にそびえる「信濃富士」で名高い有明山（標高二二四八メートル）を望むことができる。有明山は古くから神の山とされた山であり、鎌倉時代には京都にもこの山の名が知られていたのか「続古今和歌集」の中の後鳥羽上皇の「かた敷の衣手寒く時雨つつ 有明山にかかるむら雲」の和歌に代表されるようにいくつかの和歌の題材にされた山ともいわれる優美な山である。

そして、険しくそびえ立ち優美な山容から、修験場とされたらしく、穂高町有明の有明山の麓には、密教寺院である明王院平福寺（高山寺）があり、この寺には鎌倉時代の不動明王がまつられている。ちなみに、有明山に一般人が登った記録が残る古いものでは、江戸時代の享保六年（一七二一年）板取村（現在の松川村板取）の百姓、高橋太兵衛ら一七人が修験僧宝重院有快の案内で登った記録である。密教寺院が麓に残ること、やや時代が下がるが修験僧の案内で一般人が登った記録があることなどからも有明山が修験場とされたことがわかる。

力を強めようとしたのである。おそらく須沼館にいたこの錫杖をもった修験者も、約十キロの道をたどって有明山の麓に行き、有明山登頂を目指し、錫杖をつけてシヤクシヤクと、鳴らしながら修業をしていたと想像される。この居館の近くには常光寺という寺が昔あったと伝えられており、この寺は、もしかするとこの修験者のための密教寺院であったと考えられる。

先にも書いたが、平地のこのような館跡から山岳信仰の遺物が発見されることは珍らしく、今後山岳信仰の人の動きやその在り方を知るうえで重要なものとなるであろう。

（大町市教育委員会）



須沼氏居館跡Ⅰから見た有明山

歩くスキー（ラングラウフ）を

楽しもう

渡辺逸雄

人間としてこの世に生を受けて一年も経つと誰しも歩いて、更に何十年となく歩き馴れた超ベテランのはずなのに、足の裏へスキーをしきも歩く専門のスキーを付け、おまけに両手に杖まで突いているのに何故歩けないのだろうかと思議に思う。ゲレンデで立派なスキーや靴を履いていても、歩き方を見るとその人の腕前？のおおよその見当がつくから面白い。表面的な姿・形では判断できないのは何れも同じらしい。

昔は今程リフトも無く、否応なしに歩かざるを得なかったが、今は機械力で上へ上へと高度をかき、ニュートンさんに引張られて斜面を滑り降りることに専念している。平地滑走といって平地を歩くことが基本となつて体重移動や膝の曲げ伸ばしや、ストック操作などが自然と身についたものだが、「やみくもにニュートンまかせの今の風潮はいかかなものかな」とは一才口が滑つたか。

野原や山や丘を雪の無いシーズンに歩く「ハイキング」とか「トレッキング」だとか言われ、トレッキングコースも各地に設けられて賑わっているが、雪の積った冬にも歩きたいとなるとこれは大変なことになる。まず足支度が困る。深い雪にも沈まない道具としては輪カンジキもあるが、歩き馴れないと右足で左足のカンジキを踏んで動けなかつたり転んだりの悪戦苦闘の連続で、百回も歩かないうちに必ずダウンする。体力の消耗はものすごい、重労働である。

ヨーロッパアルプス地方で山の斜面を移動する道具として変遷発達した道具が一般的にスキーと呼ばれ、北欧ノルウェー地方で雪の

原野を移動する道具（前述のカンジキ）の変遷の結果が現在の「ルディックスキー」であり、「雪の原野を銃を背に狙をした」のを競技にしたのが、長野オリンピックで白馬村から野沢温泉へ会場変更になった「バイアスロン競技」である。

コースを外れてしまったが、「歩くスキーなんて最近の流行語」みたいに感じられているが、何を今さら、スキーの基礎は歩くスキーである。ゲレンデの混雑から周辺へ一歩踏み出せば兎の足跡や、木々の固い芽の下にも春の息吹を感じたり、雲の流れや雪の結晶、樹枝の霧氷に目をみはり、ちよつとしたキツ



カケが「自由に雪の山野を歩いてみたら素晴らしいだろうな」という想いにつながって行く人が、意外に多勢おられる。

事実歩くスキーを経験されたから、寒い冬に家に閉じこもっていた今迄よりも行動半径が急に広がった人、冬景の撮影範囲が広域になった人等々、いずれも今まで行けなかった処へも気軽に歩いてしまったことに驚き、喜び、新しい発見をする。こんな素晴らしいことをもつと多くの人に味わってほしいという想いから、白馬村のヤマトヤスポーツ店の松沢社長に御支援を願って、山博友の会へ歩くスキーセットを数多く備品として寄贈していただいた次第である。

皆さんにもつと歩くスキーを楽しんでいただくお手伝いを、させていただきますことが私の仕事だと思っています。

土の上を歩くのと雪の上をスキーで歩くのとの違いは、足の下が滑つて移動することです（スケートも同じですが）。

下駄で歩くのではなく、スリッパをつかっけて板の廊下を引きつづいて歩く要領で歩を進めればOKです。何だこんなことかということになる訳で、おまけにお年寄りでもないのに両手に杖まで突いているんですから……。ゲレンデで滑るスキーは踵があらなくて歩くのが困難ですが、歩くスキーは踵があるから後足としては大変楽で歩き易い訳です。

本来脱ゲレンデという設定されたコースよりも、勝手気ままに山野を歩けば満足度は最高ですが、初心者が最初から深い雪の中では苦勞が多いので、整備されたコースで練習するのが能率が良い。大町周辺では日向山ゴルフ場のコースは常時整備されており、レンタルスキーセットもあり、ひと汗かいたあとは温泉クワブールも楽しめます。

一部の人しか楽しんでいない冬の信州の自然に、もつと多くの人々がドツブリとつかつて満喫し満足され、加えて体位向上健康増進に寄与できるならば大いに役立つと、長野県

スキー連盟では「歩くスキー指導員」を各地に養成し指導にあたらせ、メーカーサイドでは用具の改善開発に努めています。歩くスキーの構造上の要件は、軽く、前へは滑るが後へ滑らないこと、靴は底が曲り踵が上がり保温性も良くむれず濡れずと必須条件は多い。ストックは体のバランス保持にも役立つが、前への推進力としての役割の方が大きいからアルペン用とは比べ物にならない位に長く軽い。

ロングスパッツも役立つし、汗対策としては背中にタオルを入れておけば便利だ、脱着し易い上衣を用意し、ザックの中へはオニギリ、飲物、替靴下、オヤツ位は最小限として行程に合わせてパッキングしよう。

気の合つたお友達と連れだって、晴れた北アルプスを眺めながらとなると最高ですね。ロングコースになるが鹿島槍国際スキー場から小熊山林道經由木崎コースとか、八坂村の唐花見湿原から鷹狩山經由雲松寺林道コースや、ヤナバススキー場から権現山經由美麻村新行のソバコースや、居谷里水源池から山越え木崎コース、雪があれば池田町大峰山周辺コース等など、パーティーで行動すれば何も、コースカッターで整備されたコースでなくても結構楽しく、自由に、いい汗かけますよ。

さあ出かけましょうや冬の野原へ、冬の山野へ、そして思う存分に満喫しましょうや、信州の冬の自然美を！。

長野県スキー連盟公認
ラングラウフスキー指導員

山と博物館第39巻第1号
発行所 〒388長野県大町市 TEL 0261-2111
印刷所 長野県大町市 山岳博物館
印刷部 大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、三三〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野四一三三三九三)